

「007 スカイフォール」★★★★

2012（平成24）年11月6日鑑賞＜試写会・T
OHOシネマズ梅田＞

監督：サム・メン德斯

ジェームズ・ボンド／ダニエル・クレイグ

M（MI6本部の上司）／ジュディ・デンチ

シルヴァ（元諜報部員）／ハビエル・バルデム

ギャレス・マロリー（情報国防委員会委員長）／レイフ・ファインズ

イヴ（ボンドのアシスタントエージェント）／ナオミ・ハリス

セヴリン（謎の女）／ベレニス・マーロウ

キンケイド（幼年期のボンドを知る男）／アルバート・フィニー

Q（MI6の武器開発担当）／ベン・ウィショー

パトリス（敵方の秘密情報部員）／オラ・ラパス

2012年・アメリカ、イギリス映画・123分

配給／ソニー・ピクチャーズ エンタテインメント

＜『ボーン』シリーズとのカーチェイス比較は？＞

『007』シリーズ50周年、23作目となる本作、冒頭のカーチェイスは、何とタイトル表示前の13分間にも及ぶから、まずはそれに注目！その舞台は、トルコのイスタンブール。MI6（英国情報局秘密情報部）のエージェント「007」ことジェームズ・ボンド（ダニエル・クレイグ）は、MI6本部に勤める上司M（ジュディ・デンチ）からの非情な指示に従い、負傷している同僚エージェントを見捨て、アシスタントエージェントの女性イヴ（ナオミ・ハリス）が運転するランドローバーに乗って敵方の秘密情報部員パトリス（オラ・ラパス）の乗る黒のアウトディを追い始めた。パトリスが大破されたアウトディを捨ててバイクに乗り換えると、ボンドもバイクでこれを追跡。バイクでの追跡劇は住居の屋根の上でド派手に展開されるが、その後2人の追跡劇は移動する列車の上に。イヴは必死にMに対して実況中継しながらランドローバーを運転してこれを追跡するが、列車上でもつれ合う2人に対して、Mからは「射殺せよ！」というこれまた非情な命令が・・・。

私はずっと『007』シリーズにおけるカーチェイスが最もスリリングで最も面白いと思っていた。確かにここに見るカーチェイスはそれなりに迫力があるが、別の言い方をすればこれは動体視力の衰えた私の目にも十分わかり楽しむことができるもの。それに比べると、8月7日に観た『ボーン』シリーズ3部作に続く『ボーン・レガシー』（12年）は「より複雑に！より過激に！より屈強に！」になっているうえ、同作後半に登場するマニラの町を舞台としたカーチェイスはあまりにもスピードが速すぎるため容易についていくことができなかった。ちなみに、8月6日に観た『トータル・リコール』（12年）でのホーバーカーによるカーチェイスもすごかったが、『ボーン・レガシー』のすごさを観てしまうと『トータル・リコール』のそれは屁みたいなものだった（『シネマルーム29』165頁参照）。しかし、『ボーン・レガシー』と本作とのカーチェイス比較は？

＜50周年の本作のテーマは新旧交代？＞

本作は冒頭のカーチェイスによって「ジェームズ・ボンド死す！」のニュースが流れることになる。これによってMはボンドの追悼文を書く羽目になったうえ、MI6の上に立つ情報国防委員会委員長のマロリー（レイフ・ファインズ）からは事実上の引退勧告を受けるが、さてMは？「あの最悪の日」以降人里離れたビーチに身を潜め無気力な日々を送っていたボンドが再びMの前に現われたのは、最強の敵からのサイバーテロによってMI6の本部が爆破されたためだが、それってボンドが任務への復帰を願ったこと？そう理解したMは規則に従ってボンドに厳しい肉体的テストを課したが、さてその可否は？

ボンドがああ時の傷のために得意の射撃でもかつての実力を発揮できない姿や、持久力テストでヘトヘトになる姿を見ていると、新旧交代を感じざるを得ないが、それでもボンドが「合格」できたのはなぜ？人間的といえど人間的だが、『007』シリーズのジェームズ・ボンドに最高のカッコ良さを求める人々には、50周年の本作に見るジェームズ・ボンドはどう映るだろうか？

ちなみに、『007』シリーズではMI6武器開発担当者のQが面白い存在だが、本作ではそこに若手のQ（ベン・ウィショー）が登場する。ボンドからみればQはニキビ面の若造にすぎないが、Qに言わせると「あなたが1年かけて敵に与えるダメージを僕は紅茶を飲みながらパソコンであつという間にできる」そうだから、事実上既にボンドの時代は終わっているのかもしれない。初期の頃の『007』シリーズでは、Qがボンドに支給するさまざまな武器や小道具が見ものだったが、本作で支給されたのは、ボンドの指紋でしか撃てない銃とボンドの所在地を示す機器のみ。これはMI6にも経費削減の要請が強いせいかもしれないが、別の見方をすると、今はパソコン操作が全ての時代となったため、現場のスパイの武器はこれだけで十分ということ・・・？

＜『ボーン』シリーズは複雑だったが、こちらは単純？＞

前述のように『ボーン・レガシー』は「より複雑に！より過激に！より屈強に！」になっていたから、ストーリー構成もややこしく、その理解は困難だったが、『007』シリーズ50周年の本作のそれは単純。すなわち、かつてMの優秀な部下だったエージェントのシルヴァが冒頭のボンドと同じように非情にもバツサリ切り捨てられてしまったため、その個人的な恨みを原動力として、M個人やMI6ひいては英国そのものに対して復讐するというのが本作のストーリーの軸だ。シルヴァを演じるハビエル・バルデムは何といっても『ノーカントリー』（07年）での殺人鬼を思わせる演技が絶品だった（『シネマルーム18』21頁参照）が、本作でもそれと同じように、複雑な性根をもった復讐鬼シルヴァを見事に演じている。

また『007』シリーズでは近時MI6幹部であるMの位置づけが高まっているが、本作でも引退を間近に控えたMと諜報部員としての最盛期を過ぎた（？）ボンドとの濃密な信頼関係が描かれる。しかし、それはかつてMとシルヴァとの間にもまちがいなく存在していたものだ。しかるに、ボンドは今なおMとの信頼関係が続いているのに対して、何故シルヴァはその正反対の位置に。Qの登場はMI6における世代交代を考えさせるが、本作の軸はあくまで旧世代としてのボンドとシルヴァの対決になる。そして、その対決の原因がシルヴァのMに対する個人的恨みということだから、とにかく本作はわかりやすい。もっとも、それが映画として成功しているかどうかは別問題だが・・・。

＜50周年のボンドガールの品定めは？＞

『007』シリーズではボンドガールの品定めがお楽しみの一つ。かつて『007は二度死ぬ』（67年）で浜美枝が白の水着姿でボンドガールとして登場した時は感激したが、それ以降日本人女優にお呼びがかからないのはなぜ？それはともかく、本作でボンドのアシスタントエージェントを務めるイヴはストーリー展開上の節目、節目に登場するが、彼女はあくまでボンドのアシスタント的存在。したがって、いくら女好きのボンドでもイヴには手を出さないことが明らかだから、あまりボンドガールとしての価値はなし？

それに対して、謎多き美女として登場し、本来はボンドの敵であるにもかかわらず、いつの間にかボンドとしゃべりいい仲になり、ボンドの味方になってしまうというのが本来のボンドガールの役割だが、本作でのそれがセヴリン（ベレニス・マーロウ）だ。マカオのカジノで魅せる謎の美女ぶりや、日本の長崎市沖にある無人島の軍艦島を使ったシルヴァとボンドとの対決にみるセヴリンの哀れさ（？）は、それなりに見どころがある。もっとも某所のシャワールームにおける『007』シリーズおなじみの濡れ場シーンは、いささかサービス不足気味では？もっとも、これもボンドが戦闘能力の減退と共にあちら方面の能力も減退してきたと考えれば納得だが・・・。

＜クライマックスの攻防戦をどう評価？＞

中半から登場してくるシルヴァが、ボンドとの闘いに敗れて簡単にMI6の本部に護送されてきたのは意外だったが、そこにはきっと裏があるはず。捕虜となってガラス張りの部屋に入られたシルヴァが、それでもなお自信たっぷりに面会に来たMと対峙するシーンは『羊たちの沈黙』（91年）におけるアンソニー・ホプキンス演ずるレクター博士と、ジョディー・フォスター演じるFBI新人捜査官との有名なシーンを彷彿させるが、こんなことで参ってしまうシルヴァではないはずだ。そんな目で見てみると、案の定・・・。

50周年作にふさわしく本作では、ジェームズ・ボンドの故郷であるスコットランドにある旧家がクライマックスの「戦場」として登場する。シルヴァの狙いはMの命。そう確信したボンドは、Mをかつての愛車アストン・マーティンDB5に乗せて自分が幼年期を過ごした旧家へ連れて行き、そこでシルヴァを迎え撃とうという作戦を立てたが、その是非は？しかも、本作は大サービスとしてここにボンドの幼年期を知るキンケイド（アルバート・フィニー）がまだひとりで暮らしているという設定にした。したがって、ここでもボンドは昔の猟銃や火薬そして最終的にはナイフを武器として、パソコンを駆使し、近代兵器を操るシルヴァと対決することになる。さらに古さを強調するのは、この旧家には何と地下の抜け道まであるということだが、さてそんな設定がクライマックスの攻防戦においていかなる役割を？

ボンドたちが十分な防御線を敷いたところにシルヴァや部下たちが現われたから、当初の闘いは「籠城組」有利に展開したが、シルヴァがヘリコプターまで投入してくると・・・『ボーン・レガシー』でも、ボーンが隠れていた山小屋は飛行機からの一発の爆弾によって吹き飛ばされ、ボーンは九死に一生を得たが、シルヴァが近代的兵器をいくらでも使えるのなら、こんなまどろっこしい攻防戦をやらず、ヘリコプターから爆弾を一発落とせばジ・エンドでは・・・。ついそんな考えが浮かんできから、私には本作におけるこのクライマックスは手に汗握る興奮とは言い難いものだった。さて、あなたはこのクライマックスをどう評価？